

## 展示記録

## 清風一過—大島正隆の歴史学と民俗学

会期 2011年9月27日(火)～10月3日(月)

会場 東北大学附属図書館本館エントランスホール

大島正隆文書研究会<sup>(1)</sup>

## 1. 企画の趣旨

大島正隆(1909～1944)は、若くして亡くなった日本中世史の研究者である。東北帝国大学法文学部に入学し、日本史を専攻(卒業後は助手)する一方で、柳田国男に民俗学を学び、東北地方に関する先駆的研究を残した。

大島の逝去後、遺品等は研究室および遺族に伝来したらしい。史料館所蔵の大島文書は、①前者を保管してきた伊東信雄氏が1988年9月に逝去され、御遺志により伊東氏遺族から寄贈された資料群(地図1点のみ葛西森夫氏寄贈)、②1989年5月に正隆実弟の智夫氏から寄贈された資料群、③その他有縁の方々から寄贈された資料群という三つの資料群から成り、2010年3月時点でいったん整理が終了し公開された(287点)。ところが、それが呼び水となったのか、新たな大島正隆

関係資料の発見が続き、次々とご寄贈が重なった。2010年9月時点で増補を含め329点を公開したが、その後も100点近い追加寄贈があったため、現在目録の増補改訂を進めている。

追加寄贈いただいた資料には、正隆本人の書簡が多く含まれており、それによって当時の歴史研究の一面が明らかになった<sup>(2)</sup>。そうした点をふまえ、大島正隆文書の整理を行ってきた学内外の研究者の手で、最新の成果や動向を公開することを目指し、本展示が企画された。館長以下史料館スタッフの御了解をいただき、東北大学史料館と本研究会の共同主催となった。東北地方の歴史研究者が多く集まる東北史学会の大会が、本年度は10月1-2日に仙台(東北大学)で開催される予定であったため、それにあわせて10月1日の夕方に研究会の有志5名による展示解説を実施した。

史料館は例年、秋に企画展示を実施していたが、今年は震災のため開催が困難であったこともあり、資金の確保などの都合があった面がある。一方で、春に予定されていた附属図書館100周年記念展示が震災の影響で秋に移動したため、会期が制限されたことは残念であった。そのため、2012年6月の東北大学国史談話会にあわせ、再度開催する方向で準備を進めている。

## 2. 展示の概要

主催者挨拶や大島本人を紹介するパネルに続き、全体を4部で編成した。

- (1) 第二高等学校時代
- (2) 東北帝国大学時代



## (3) 東北中世史研究

## (4) 晩年と再評価の動き

詳細は、下記の「展示資料目録・解説」を参照願いたい。

展示期間中、入口にカウンターを設置し、自主的に押してもらうことで入場者数を記録できるようにしたところ、累計で141名であった。実際の数はいずれを上回ると思われる。会場に設置されたノートへの書き込みや、史料館への問い合わせ等、一定の反響があった。

## 3. 謝辞

今回の展示には、共催として東北大学附属図書館、東北史学会、東北大学文学研究科日本史研究室に加わって頂いた。また、正隆末弟の智夫氏には高齢をおして9月30日(金)に、翌日は森嘉兵衛ご遺族の森ノブ氏にもご来仙いただき、展示をご覧いただくとともに当時の話を伺う機会を得た。以上をはじめとする展示をご支援いただいた方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

## 展示資料目録・解説

※展示に使用したパネルやキャプションの文字情報を掲載する。画像情報については紙面の都合により割愛した。

## 0-1) 主催者あいさつ

東北大学史料館では、大学の歴史に関わる史料の収集・整理・公開を行っています。今回展示いたします「大島正隆文書」は、1936年(昭和11)に東北帝国大学法文学部(現在の東北大学法・経済・文学部の前身)に入学し、卒業後は国史研究室(現在の文学研究科日本史研究室)副手として、日本中世史、とくに東北地方の歴史研究において先駆的役割を果たした大島正隆(1909～1944)の関係資料です。

「大島正隆文書」については、昨年に329点の整理が完了し、一般公開を開始しました。ところがその後、幸運なめぐりあわせがあり、正隆末弟の大島智夫氏や、岩手県の研究者森嘉兵衛氏ご遺族(森肇氏)から、大量の資料を追加で寄贈していただくこととなりました。学内外の日本史や宗教史などを専攻する研究者が新たに整理を行い、従来以上に大島正隆の事跡が詳しく見えてまいりましたことから、ここに展示の機会を設けることとなりました。なお展示に際しては、大島が実質的に整理をした

「秋田家史料」を所蔵する縁もあり、東北大学附属図書館を会場に使わせていただくことになりました。また、東北史学会、東北大学日本史研究室にもご後援をいただきましたことに、感謝申し上げます。

2011年9月

東北大学史料館  
大島正隆文書研究会

## 0-2) 大島正隆文書について

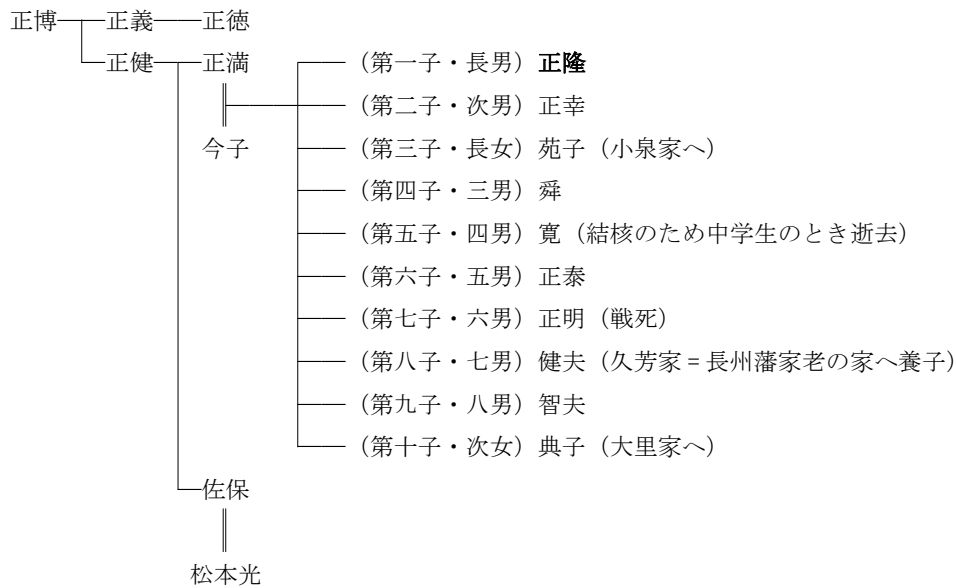
大島正隆(1909～1944)は、若くして亡くなった日本中世史の研究者です。牧師・大島正健の孫、生物学者・正満の長男として台北に生まれ、麻布中学を経て旧制第二高等学校に進学しました。キリスト教学生寮に起居し二高山岳部のリーダーとして活躍する一方、正義感の強さから学生運動に身を投じ、投獄・拷問・退学を体験します。釈放後、関係者の理解により検定試験を受けて東北帝国大学法文学部に入学し、日本史を専攻(卒業後は副手)する一方で柳田国男に民俗学を学び、東

北地方に関する先駆的研究を残しました。  
大島文書の中心になるのは、書簡や手帳、史料調査時のフィールドノート、大量の調査メモなどの自筆資料で、彼の歴史学・民俗学が形成された様子を物語る一次資料です。伊東信雄氏ご遺族、大

島末弟の智夫氏などから寄贈され、全部で500点近い資料群となりました。

0-3) 【写真パネル】大島正隆 (1936年 27歳)

0-4) 大島家関係系図



0-5) 大島正隆略年譜

年 (歳)	大島正隆その他	大島の著作物
1909	3月 出生	
1922 (13)	4月 京都府立第一中学校入学	
1924 (15)	東京の麻布中学校へ転校	
1928 (19)	4月 旧制第二高等学校入学	
1932 (23)	共産青年同盟二高班結成に参加	
1933 (24)	1月 治安維持法違反で検挙される 二高退学	
1934 (25)	2月 公判開始。執行猶予となり釈放	
1935 (26)		3～5月 「飯豊・朝日の獵人達」、「飯豊山と大平治のこと」*
1936 (27)	1月 尚和会に参加。 4月 東北帝国大学法文学部入学 8月 民間伝承の会に入会 第2回民俗学講習会 (國學院大) に参加 9月 2週間 山形県西置賜郡北小国・小国本・南小国村を調査 11月 尚和会解散	11月 「東北地方の耳塞餅」(『近畿民俗』1-5)

年(歳)	大島正隆その他	大島の著作物
1937 (28)	10月 東北帝大国史学会例会にて柳田国男を囲む座談会 5月から開始された柳田による東北帝大における連続講義も終了	1月 「村の組織」(『民間伝承』への最初の投稿。以後、同誌への投稿多数) 12月 「長者ヶ原雑記」*
1938 (29)	7～8月 島根県隠岐島後都万村調査 8月 民間伝承の会の木曜会で同上調査を報告 9月 卒論準備のため岩手県調査 森嘉兵衛を初めて訪問	1月 「葬送に関する二、三の報告」(未発表) 12月 「厚みのない土地」(『民間伝承』への最後の投稿)。 12月 卒論「仙台領農村の成立展開過程」
1939 (30)	2月 秋田家史料、東北帝大へ搬入 3月 東北帝大、卒業 4月 国史研究室嘱託(副手)となる	7月 「海上の神火」*
1940 (31)		6月 「『檜山御前』に就いて」* 10月 『秋田家蔵品展覧目録並解説』
1941 (32)	4月 東北帝大基督教青年会寄宿舎入舎	2月 「奥羽に於ける近世大名領成立の一過程」* 6～7月 「秋田家文書による文禄・慶長初期北国海運の研究」* 12月 「マタギ言葉その他」*
1942 (33)	この年、東北学院講師を務める	5月 「北奥大名領成立過程の一断面」* 9月 「鎌倉時代の奥州留守氏」* 9月 「秋田家文書」(『文化』9-9)
1943 (34)	5月 朝鮮・満州を旅行	4月 「奥州留守氏考」* 11～12月 「慶長五年の奥羽諸侯」*
1944	1月 逝去	

\*印は『東北中世史の旅立ち』所収。1935年の2編は「大島準」名、「マタギ言葉その他」は「三吉」名で発表。「秋田家文書による文禄・慶長初期北国海運の研究」は古田良一名義で発表。生前、未発表で、執筆時期が不明の「伊達政宗の小田原参陣」は載せていない。

## 1) 第二高等学校時代

1928年(昭和3)に第二高等学校に入学した大島は、山岳部のリーダーとして活動します。「三吉」の異名をとり、後輩たちから畏敬される存在でした。また、伝統ある二高キリスト教生寮の「忠愛之友寮」に起居し、多くの友人に恵まれました。

その一方、昭和恐慌下の社会矛盾を感じる中で、彼は共産青年同盟の中心となって学生運動を指導しました。それは当時あっては非合法活動であったため、1933年(昭和8)1月に検挙・起訴され、退学処分となったのでした。大島は一年余の監獄生活を送り、その間に凄絶な拷問を受けながら、同志たちの不利になる自白はしなかったと伝えられます。結局1934年(昭和9)2月に公判が開始され、「転向」を認められて釈放されました。この間、マルクス主義を客観的に見るようになり、キリスト教徒として生きる決心を固め、新たな人生を開始したのでした。

## 1-1) 母今子あて書簡 4通 1933年(昭和8)

「仙台市片平40番地」=宮城県監獄片平丁支署から母の今子に宛てた封書。1933年1月11日に検挙され、壮絶な拷問などを経て翌年1月4日に結審する。2月の公判開始まで母子の面会は許されなかった中で結審間近の12月に書かれた手紙。

## 1-2) 大島正隆所有地図(宮城・山形・福島三県20万分の1)

朱鉛筆で大島の踏査した道が示されており、二高山岳部時代に使用されたものと思われる。二高山岳部の後輩であった葛西森夫・東北大学医学部名誉教授の寄贈。

## 2) 東北帝大生として

1936年(昭和11)4月、大島は東北帝大法文学部に入学します。検挙・投獄、退学処分と苦難を重ねた大島にとって、感慨もひとしおであったことでしょう。

大島は、国史研究室に属しました。まだキャンパスが片平丁にあった時代です。同研究室は、教授・<sup>ふるたりい</sup>古田良一(中・近世史)、講師・<sup>きたさだきち</sup>喜田貞吉(考古学・古代史)、講師・<sup>いぎひさいち</sup>伊木寿一(古文書学、非常勤)という陣容で、大島の指導教員は古田教授でした。大島は、入学前より学んでいた民俗学の調査に精を出すとともに、歴史学の勉強にも打ち込みます。またキリスト者として生きる決意を固めていた大島は、法文学部の<sup>いしはらけん</sup>石原謙教授(宗教哲学、キリスト教史)の薫陶も受けることになります。

## 2-1) 入学と歴史学の探求

大島は、入学前の1936年(昭和11)1月から<sup>しょうわかい</sup>尚和会という団体に参加していました。これは思想取締当局と大学の肝入りで発足した修養団体で、治安維持法違反の嫌疑で東北帝大や二高を追われ、その後「転向」を認められた者が会員となっていました。「転向」後の心境を語り合い、日本の「国体」を中心とする研究を行っていたといえます。無理やり思想を「矯正」しようという意図が明白で、会への参加が大学への復学・入学の条件とされていたのです。この会は1936年11月に解散となりますが、大島らはその後も保護観察下に置かれます。決して自由の身になれたわけではなかったのです。

とはいえ、大島は大学という新しい場で、自らの学問を形づくっていきます。その跡は、「大島正隆文書」にのこされた多数のノート・メモ類に刻まれています。おおむね縦10cm×横15cmの手製のメモ帳です。

2-1-1) 【写真パネル】<sup>しょうわかい</sup>尚和会の発足を告げる新聞記事(『東京日日新聞』1936年1月27日)

会員には、後に農業経済学者となる<sup>くりはらくじゅ</sup>栗原百寿(1910-55)の名も見える。また、<sup>いしもだしょう</sup>石母田正(旧制二高出身。歴史学者)の親友・日野五郎(医学部)も含まれていた。

## 2-1-2) 父正満あて書簡写 1936年(昭和11)4月28日付

大学入学直後に仙台から出されたもの。ヘーゲルの原書を贈られたことに礼を述べている。大学生活についても、講義ノートの作成が大変なこと、大学食堂の食事が不味いことなどをユーモラスに記す。大学入学を果たした高揚感が伝わってくる。

## 2-1-3) 大島の読書メモ

1936・37年(昭和11・12)のものが17編のこっている。とくに36年の11・12月に集中し、1日に3編作られている日もある。大島の研鑽ぶりがよくわかる。柳田国男の影響が濃い西岡虎之助、牧野信之助の論文メモが多く、また、佐野学の著作などマルクス主義に立つものも含まれる。

## 2-1-4) 大島の受講ノート

左上から右下へ順に、古文書学(伊木寿一講師)、東洋史特講(曾我部静男教授)、西洋史演習(大類伸教授)の受講ノート。日本史関係はもちろんであるが、西洋史関係のものも多数のこされている。ヨーロッパ言語を得意とした大島ならではのことであろうか。

## 2-2) 柳田国男との邂逅と民俗学

大島正隆の民俗学は、時期的にもテーマ的にも、社

会主義運動と歴史研究の間をつなぐ位置にあります。当時、社会主義に情熱をもやした青年たちの中には「原始共産制」への憧れから民俗調査に身を投じる人たちがいました。大島も恐らくその一人でした。

フィールドで得た山村生活の実感から、大島は中世村落のイメージをふくらませていったに違いありません。さらに東北や隠岐の海村調査からは、中世末以来の日本海海運史の構想へと至ります。

20代後半のほぼ5年間、彼が民俗学に傾倒できたのは、日本におけるその組織者であった柳田国男が、自身の学問を体系化し、山村や海村の調査を主宰していたのとちょうど時を同じくしていたためでもありました。

大島の文章からは、山を愛し人を愛したその豊かな感受性が偲ばれます。

### 2-2-1) 柳田との出逢い

1934年、釈放されて東京の自宅に戻った大島は、翌年頃から柳田国男に師事し、民俗学を学び始めます。当時、柳田は全国の山村調査を組織していました。山が好きで、人と交わることも好きだった大島の関心とうまく合ったのでしょう。東北帝大入学後は柳田主宰の「民間伝承の会」に入り、会誌に何度も寄稿しています。

1937年には柳田が東北帝大を訪れて「日本民俗学」の連続講義を行い、大島はその詳細な筆記を残しています。柳田は後に振り返って、「大島君が非常に熱心にノートを取ってくれたので、いつか借りて見て置かうと思つて居るうちに、この人はあまり勉強し過ぎて若死にをってしまった」と述べています。

#### 2-2-1-1) 柳田講義の受講ノート『日本常民文化紀要』15・16 (1990・91年)

1937年、延べ17回にわたり東北帝大において「日本民俗学」と題し行われた講義を、大学生の大島が筆記したもの。柳田民俗学の体系化過程と、それを吸収しようとする大島の意気込みがうかがえる。のち1990・91年の『日本常民文化紀要』誌上に刊行された。

#### 2-2-1-2) 柳田講義へのレポート「葬送に関する二三の報告」

(1) 棺担ぎ、(2) 葬式草履(墓場で草履を脱ぎ

帰る習俗)、(3) 願を果す、という3項目について、宮城・岩手両県の6集落での実地調査に基づきレポートしている。3番目は「願もどし」「願ほどき」とも呼ばれ、祈願を破棄するまじない。

#### 2-2-1-3) レポートへの柳田の論評

特に3番目の『願もどし』はどうしてもまだ理由の見当のつかぬ問題だと述べ、「たつた一つの例の存在といふことに注意するだけに止まつて居てはいけない。是一つからでも何か暗示を捉へるやうでないと今に時間が惜くなるであらう」と、大島の夭逝を予見するかの言葉を残している。

#### 2-2-1-4) 【写真パネル】東北帝国大学における柳田国男

テーブル席 奥左から、太田正雄(木下奎太郎)、(一人略)、阿部次郎、斎藤茂吉、柳田国男。

### 2-2-2) フィールドでの日々

大島は柳田の組織した山村・海村調査に参加しつつ、東北地方各地や隠岐で民俗学的フィールドワークを繰り広げました。特に愛着を持っていたのは、二高山岳部時代から通いつづけた山形県西置賜郡おぐにの小国地方であったと思われ、数々の文章からは、マタギと呼ばれる狩人たちとの温かい交流がうかがわれます。

1938年夏の隠岐調査に関しては写真や自作メモ帖、『採集手帖』が残されており、フィールドで見たこと・聞いたことが書き留められ、浄書され、やがて論文「海上の神火」に結実するまでの過程を追うことができます。この後、卒論執筆を境に大島の関心は急速に歴史学へ向かってゆくことになります。

#### 2-2-2-1) おぐに小国『採集手帖』(現物は成城大学民俗学研究所蔵)

柳田らが作成した山村調査用の採集手帖。100項目に記入できるようになっている。ここに記された村の組織についての調査内容をもとに、「長者ヶ原雑記」の図が描かれていることがよくわかる。

#### 2-2-2-2) 「長者原ヶ雑記」(『仙台郷土研究』7巻12号、1937年所収)

大島が二高山岳部時代から通いつづけた、「一つ鍋の飯

を喰べあった間柄」である小国長者ヶ原の人々について書かれた論文。特に村落組織や共同財産に紙幅の多くが割かれている。中世村の実態への関心と「原始共産制」への憧憬が垣間見える。

### 2-2-2-3) 【写真パネル】隠岐の海辺で撮った写真

#### 2-2-2-4) 隠岐からの絵葉書(弟正明あて、1938年8月1日付)

『島送り』第四日目」などとおどけ、「肉の締った鯛の刺身と実に軟かくあまみのあるシヨツパー、サバエ、アワビなど三度々々お目にかゝる」と、海の幸の豊かさを語っている。「シヨツパー」は大島家で用いられていた語で、イカの刺身のこと。

#### 2-2-2-5) 隠岐での調査メモ(自作メモ帖)

のち論文「海上の神火」に結実してゆく聞き書きメモが多数残っている。鉛筆や万年筆で走り書きされており、これらをもとに浄書し直したのが『採集手帖』である。

#### 2-2-2-6) 隠岐『採集手帖』(現物は成城大学民俗学研究所蔵)

山村調査用の採集手帖と同じく、柳田らの作成によるこの海村用手帖にも100にわたる調査項目が挙げられている。大島が、自身の論文に活かせなかった項目も丹念に調査していたことがよくわかる。

#### 2-2-2-7) 「海上の神火」(『文化』6巻7号、1939年所収)

漁民が海で灯したり見たりする「焼火」信仰についての論文。岩手県気仙郡綾里砂子浜の老人たちの話が執筆の機縁になったという謝辞が記されている。これは今回の東日本大震災で甚大な被害を受けた地域である。

### 2-3) 卒業論文

1938年(昭和13)4月、大島は最終学年である3年に進学しました。卒業論文のテーマを「莊園崩壊から近世村落成立の時期に於ける地方小土豪の地位の変遷を跡付けること」「小土豪とその家人(名子)の一团を有機的な労働単位として親・子の関係に於て分析すること」に定め、準備を開始します。岩手

県師範学校教諭であった森嘉兵衛(1903-81。のち岩手大学教授)の教示を得て、岩手県の海岸部を中心に調査旅行も行っています。しかし、名子制度については十分な史料を得られず、仙台藩領となった地域(岩手県南部から宮城県)の中世から近世への移行を論じることになります。この論文は公表されるに至りませんでした。豊臣政権が外部から奥羽に与えた衝撃を重視するなど、後に花開く大島の研究の萌芽を多数見ることができます。

#### 2-3-1) 父正満あて書簡 1938年(昭和13)6月24日付

卒業論文に関する机上での文献調査が終了したので、岩手県方面に実地調査に出かけたいのとの希望を述べている。調査計画は具体的で、焦点が名子制度にあったことがうかがわれる。柳田国男の指導を受ける予定とあるのは興味深い。

#### 2-3-2) 森嘉兵衛あて書簡 1938年(昭和13)7月3日付

大島が森嘉兵衛あてに出した最初の書簡。文面からも書体からも緊張感が伝わってくる。大島は卒論構想を述べ、岩手県での調査予定を詳細に記している。森の返事はすぐに届き、両者の学問的交流は大島の死の直前まで続けられる。

#### 2-3-3) 【写真パネル】1938年6月24日付け父正満あて大島正隆書簡付函「昭和十三年七月調査旅行予定略図」

実際の調査旅行は9月に行われた。備考に「森嘉兵衛氏訪問ノ予定」とある。調査地の多くは、東日本大震災により壊滅的打撃を受けた。大島が調査した時も、「昭和の三陸大津波」から5年しかたっていない。なかつた。

#### 2-3-4) 大島の卒業論文「仙台領農村の成立展開過程」

600字詰原稿用紙131枚(400字換算約200枚)。1938年(昭和13)12月20日脱稿。開いている箇所では、豊臣政権の統一政策について述べている。大島の先駆性がよくわかる。卒論には審査の際の書き込みが見られる。東北大学附属図書館蔵。

## 2-3-5) 矢内原忠雄への献辞

矢内原忠雄（1893-1961）は、軍国主義的風潮に抗して植民研究を科学的・実証的に進めたことで知られる。大島の信仰上の師でもあった。東京帝国大学教授をつとめていたが、1937年（昭和12）12月、民主主義的言動を理由に辞職に追い込まれた。大島の献辞はその1年後のものということになる。矢内原は戦後、東京大学総長をつとめた。

## 2-3-6) 大島正隆「仙台領農村の成立展開過程」目次

## 第一篇 仙台領成立過程の一般的考察

序言

本論

伊達家

伊達家と北条家

豊臣秀吉と伊達北条両家

秀吉の奥州仕置

葛西氏没落

検地

木村氏の政治

葛西大崎一接

伊達氏国替

国替の意義

大名の楊合

家臣の楊合

商人の楊合

地侍の楊合

土民の楊合

仙台領成立

—農村再編成の完了

附言

## 第二篇 仙台領農村の成立展開過程

(農村内諸身分に即しての各個的考察)

## 第一章 旧城主の行方

(武士の子孫其一)

第一節 熊谷一族

第二節 小梨氏

第三節 沢辺氏

第四節 芳賀氏

第五節 鳥畑氏

第六節 菅原氏

第七節 馬籠氏

結び

## 第二章 肝入源流考(武士の子孫其二)

第一節 熊谷家

第二節 斉藤家

第三節 阿部一族

三節の概観

第四節 基本型の三例

第五節 遊佐氏

第六節 内ヶ崎氏

附論 新宿取立に就いて

第七節 今泉検断家

結び

## 第三車 農民の状況

第一節 伊具三村の農民

第二節 山中野伏

第三節 大倉村早坂氏

第四節 農民出陣の二例

第五節 草創之百姓

結び

## 3) 東北中世史の開拓

1939年（昭和14）3月に卒業した大島は、翌4月から国史研究室の副手に採用され、研究活動に邁進します。副手としての仕事の中心は、国史研究室奥羽史料調査部に寄託された「秋田家文書」の整理作業でした。また、卒業論文で取り組んだ中世から近世への社会の転換というテーマについては、東北地方における戦国大名の成立とその展開過程を研究する中で深められていきます。さらに、鎌倉時代以来の古文書を多数伝えた留守氏について、本格的な研究の先鞭をつけたのでした。この間、公表した中世史の論文は7作にのぼり、1942年（昭和17）からは東北学院高等部（現在の東北学院大学）において国史学の講義も受けもつようになります。大島は研究と教育に精一杯の情熱を注ぎ、東北地方の中世史研究に大きな足跡を残したのです。



### 3-1) 秋田家文書の研究

「秋田家文書」は、中世～近世の大名である秋田家に相伝された文書群です。戦前における秋田家からの寄託をへて、現在は東北大学の所蔵になり、「秋田家史料」と呼ばれています。1939年(昭和14)2月に福島県三春町役場から東北帝大へ移管されました。大島は、この「秋田家文書」の調査・整理に熱心に取り組みました。1940年(昭和15)10月には「秋田家蔵品展観」を開催し、この展覧会のパンフレットである『秋田家蔵品展観目録並解説』を執筆します。また、三春町役場に残されていた織豊政権期の古文書も含め、「秋田家文書」の史料紹介を発表しました。そして、その内容の分析は、『「檜山御前」について」(1940年)、「秋田家文書による文禄・慶長初期北国海運の研究」(1941年)、比内郡の浅利氏を取りあげた「北奥大名領成立過程の一断面」(1942年)へと結実します。

#### 3-1-1) 『秋田家蔵品展観目録並解説』1940年(昭和15)

東北帝大史学会が開いた展覧会のパンフレット。古田良一による序文には、「この目録及び解説の編纂は国史研究室嘱託文学士大島正隆君の大なる努力による」とある。東北帝大へ寄託された秋田家の古文書・肖像画・絵図・刀剣など33点が展示された。

#### 3-1-2) 「秋田家文書」(『文化』第9巻第9号、1942年所収)

大島による慶長7年(1602)以前分に関する「秋田家文書」の目録。一点一点の翻刻も掲載するが、紙幅の都合からであろう、抄録の形をとる。

#### 3-1-3) 「秋田家文書 織田家御内書 十四通(三春町役場保管分) 十六年六月十五日探訪」

東北帝大へ移管されなかった14通の古文書を筆写した史料カード。『文化』所収「秋田家文書」には抄録の形で掲載されている。現在、これらの古文書は所在不明となっており、全文を筆写したこのカードの内容は、きわめて貴重である。

#### 3-1-4) 「秋田家文書 海運史料(伏見作事ヲ中心トセル)」「秋田家海運史料計算メモ」

論文「秋田家文書による文禄・慶長初期北国海運の

研究」(1941年)の準備過程で作成したと考えられる史料カードと研究メモ。

#### 3-1-5) 関連書簡

父正満から正隆へ宛てた封書(1939年1月23日付)。大学卒業後の進路について、「副手として教室に留まり秋田子爵家(秋田の佐竹家?)の史料編纂を受けするのが最上」というアドバイスが見える。正満は秋田家と秋田藩主佐竹家を混同しているが、江戸時代の秋田家は三春藩主であった。

#### 3-1-6) 大島正隆書簡 2通

①弟正泰宛て葉書(1940年10月23日付)

「小生此の秋休みは古文書展の骨休にまたヒユツテぐらし」の一節が見える。

②森嘉兵衛宛て封書(1942年10月27日付)

「秋田家文書」・「鎌倉時代の奥州留守氏」の2編を送り批評を乞う内容。

#### 3-1-7) 別刷「北奥大名領成立過程の一断面」(『喜田博士追悼記念国史論集』1942年所収)

「秋田家文書」の研究成果にもとづく一編。「秋田家文書」の他にも関連史料を博搜し、比内郡の領主浅利氏の消長を秋田氏など近隣領主との関係、さらに豊臣政権との関係から描き出した。

#### 3-1-8) 【写真パネル】秋田家文書

### 3-2) 留守氏の研究

留守氏は、源頼朝から陸奥留守職むつるすしきという役職に任命され、陸奥国府の運営をになった伊沢家景に始まります。室町時代には国人として成長し、やがて伊達氏の傘下に入り、その家臣として活躍した宮城郡の領主でした。近世では伊達氏を名のり、現在の奥州市水沢の地を治めます。「留守家文書」や「余目家文書」・「奥州余目記録」など関係史料を渉猟していた大島は、1941年(昭和16)に「奥州留守氏考」(未発表)を著しました。森嘉兵衛に宛てた大島の書簡には、この論文に対する助言に感謝する内容が見え、大島と森の学術交流の一端を知ることができます。こうして鎌倉時代から近世初期にいたる留守氏の動向を概観した大島は、さらに研究を進め、「鎌倉時代の奥州留守氏」(1942年)と「奥州留守氏考」(1943年、先の未発表論文と同じ題名だが、内容

は異なる)の2編を公表します。

### 3-2-1) 未発表原稿「奥州留守氏考」 1941年(昭和16) ?

留守氏に関する大島の最初の論考であり、1943年に発表した同名論文とは内容が異なる。陸奥留守職を出発点とする中世前期の荘園地頭留守氏が、中世後期に宮城半郡の領主へと成長し、やがてより強力な大名伊達家に吸収されつつ近世初期をむかえる過程を素描する。

### 3-2-2) 大島正隆書簡 2通

①森嘉兵衛宛て封書(1941年6月27日付)

未定稿1編を送付し、批評を乞う。この論考は、未発表原稿「奥州留守氏考」を指すと考えられる。

②森嘉兵衛宛て封書(1943年6月4日付)

『仙臺郷土研究』第13巻4号に掲載された「奥州留守氏考」を送る。「題目は同じながらいつぞやお眼に入れしものとは相当変質」しているという記載が見える。

### 3-2-3) 「奥州余目記録(大槻氏本・仙台叢書所蔵)

文治—永正十一年」1941年(昭和16)3月26日

仙臺叢書に収録された「奥州余目記録」を筆写したカード。大島は水沢の小幡家を訪問し、原本調査の上、「要所校訂」をおこなっている。

### 3-2-4) 論文草稿断簡

論文の草稿か。留守氏の系譜について記述している。裏側には、「留守家文書」の内容などを年表にしたてたメモが記載されている。

### 3-2-5) 【写真パネル】留守家文書／奥州余目記録

### 3-2-6) 【地図パネル】戦国時代の東北地方の領主分布図

### 3-3) 史料蒐集の旅

大島は、徹底的な関係史料の蒐集と、その深い読み込みによって政治史を動的に把握し、みずみずしい文章をもって未開拓の分野を切り開いていきました。「大島正隆文書」にのこされた手帳には、1940～42年にかけて精力的に行った東北地方各地や東京

帝国大学史料編纂所における史料探訪の様子が克明に記されています。その成果が、「大島正隆文書」にのこされた膨大な手製の史料カードです。びっしりと記された几帳面な文字からは、学問に対する大島の真摯な思い・熱意が伝わってきます。こうした史料探求への精励と広い目配りの中から、東北地方の戦国大名を総合的に論じた「奥羽に於ける近世大名領成立の一過程」(1941年)や「慶長五年の奥羽諸侯」(1943年)は生み出されたのです。

### 3-3-1) 手帳

1940年(昭和15)、41年の史料探訪旅行の内容が詳細に記録されている。

- ・40年5月30日 秋田大館史料調査
- ・40年10月26日 大悲山文書抄
- ・40年10月28日～ 秋田庄内探訪
- ・41年3月24日～ 岩手県探訪
- ・41年4月8日 (東大)史料編纂所

### 3-3-2) 手帳

1942年(昭和17)10月5日～10月14日に実施された津軽史料探訪旅行の内容が詳細に記録されている。10月7日に祖父正健の夢をみたことが記され、「オヂイサンオアトハキットオツギシマス」と書き付けている。

### 3-3-3) 手製の史料カード 3点

大島は探訪した史料を手製のメモ帖・カードに筆写した。大量に残されたこれらの史料カードから、大島の歴史学に対する情熱・努力をしのぶことができる。

- ①「安倍・安東氏」
- ②〔史料メモ〕140枚の一部
- ③「篤焉家訓 南部伯爵家本 森嘉兵衛氏写本抄録」

### 3-3-4) 弟正泰あて書簡 1通

弟正泰に宛てた1940年(昭和15)6月22日付の絵葉書。「奥羽山脈をぬけて山形へ来た。そして一日図書館で古文書をひねくる。然し合間々に眼をあげると正面の窓一杯に雪に輝く月山の構図が浮ん

で居た」。

### 3-3-5) 別刷「奥羽に於ける近世大名領成立の一過程」(『文化』第8巻第2号、1941年所収)

大島は戦国末期の東北地方の政治史について、中央の豊臣政権との関係や影響を組み込み、立体的な像を描き出すことに成功した。その実証を支えたのが、熱心な史料蒐集と丁寧な分析である。本編では、最上義光と伊達政宗との関係を軸に、豊臣政権下にお

ける両氏の領国成立を論じた。

### 3-3-6) 未発表原稿「伊達政宗の小田原参陣」の小田原参陣

一次史料である文書を縦横に駆使して、天正17年(1589)6月から1年間におよぶ伊達政宗と豊臣政権の関東出馬の動向をあとづけ、伊達氏が豊臣政権下へ編入されてゆく過程を論じた。「中世末期より近世初期に入る過渡の姿は、この期間に於ける伊達政宗の動きに凝縮された感がある」と断じる。

## 4) 早すぎる死と再評価

1943年(昭和18)は大島にとって研究活動の最後の年となります。この年の5月朝鮮・満洲出張から帰国した後は、体調もすぐれず、夏には仙台を離れて信仰に生きたいと両親に相談します。大島はたびたび千葉県勝浦町の押塚家<sup>おしづかけ</sup>にて療養していましたが、9月には両親の説得により、ふたたびこの定宿での静養生活に入ります。その後、大島が再び仙台に戻ることはなく、翌1944年(昭和19)1月12日帰らぬ人となりました。享年34でした。

終戦後、大島の研究は脚光を浴びるようになります。1950年代後半から60年代、日本近世史や中世史の研究者が大島の諸論考を高く評価し、またそれらが一般には入手しづらいこともあって、1987年(昭和62)大島の業績が『東北中世史の旅立ち』として出版されます。これにより大島の研究は広く知られ、さらに反響を呼ぶこととなりました。

### 4-1) 最期の秋

大島は、当時結核研究の中心であった東北帝大医学部附属医院の熊谷内科の診療を受け、その「金科玉条」を守って、勝浦町での療養生活を送っていました。10月、彼が寮監をしていた東北帝大キリスト教青年会寮卒業生の送別会を行ったという知らせが届き、大島は「兄とも思はれ弟とも思つて一つ心に」生活したことを思い、感無量となります。病状の方はあまり思わしくなく、近親の来訪を大変喜びました。年が明け1944年(昭和19)の年賀状には、今年には完治し巣立ちたいと記しましたが、願いかなわず、1月12日午前7時帰らぬ人となります。キリスト教青年会寮にはすぐ電報が打たれ、寮ノートには当時の状況や正隆への思いが綴られています。また正隆は以前から和歌を詠み、特にこの療養中は自身「上総の海」と題して、多くの歌を手帳に書きためていました。遺族はこれをもとに私家版『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』を刊行しています。

#### 4-1-1) 家族あて書簡 3通 1943年(昭和18)

千葉県勝浦町の静養先から母今子、あるいは父母に宛てた葉書。正隆は1943年9月に仙台から移り、

以後翌年1月に逝去するまで勝浦にとどまる。この間、正隆は家族宛に多くの葉書をしたためており、その中の3通を展示する。

#### 4-1-2) 「上総の海」(大島正隆 1943年手帳)

正隆は千葉県勝浦町での静養中、その時々的心境を短歌に詠み、手帳に書きためていた。これには自ら「上総の海」と題され、正隆の死後、遺族により私家版『歌集 上総の海 大島正隆遺稿』としてまとめられている。

#### 4-1-3) 最後の年賀状 1944年(昭和19)1月1日

父正満・母今子に宛てたもの。父の研究の成果、母の健康、弟妹達への祝福をそれぞれ願い、つづいて自らの健康を祈念している。正隆はこの1月12日に逝去し、これが絶筆となる。

#### 4-1-4) 正隆の訃報 1944年(昭和19)1月13日

正隆が逝去した翌日の電報。千葉県勝浦局から発信、仙台市北三番丁の大学青年会宛て。本文は「正隆昨朝永眠せり 大島」と読める。

#### 4-1-5) キリスト教青年会寮日誌 1944年(昭和19)1月14日

正隆の訃報を受けた翌日の寮日誌。石館敬三執筆。正隆はこの寮監として後輩の指導に当たっていた。13日は「一同如何に祈るべきかを知らず」。

#### 4-2) 大島正隆ルネサンス

戦後歴史学が発展を遂げるなか、大島の研究が再評価されます。1950年代後半から60年代、近世史研究者の山口啓二は大島の諸論考を高く評価し、中世史研究者の藤木久志も大島の鋭い分析力と厳しい史料批判の方法を絶賛しています。

このようななか学界からの要望が高まり、1987年(昭和62)大島の業績が『東北中世史の旅立ち』として出版されます。これについて日本中世史研究をリードした石井進は、奥羽諸豪の関係を全国統一への動きの中で描き出す、すぐれた方法に学ぶべき点が多いとし、また網野善彦は、全く質の違う歴史学と民俗学の資料を生かすうる天賦の能力をもち、さらに彼の生き方そのものによって支えられた見事な歴史叙述を実現していると評価しました。近年は自治体史により「大島正隆採訪文書」が活用され、また『「大島正隆文書」目録』も作成されています。

#### 4-2-1) 藤木久志の大島論文の紹介(『国史談話会雑誌』第6号、1963年所収)

日本中世史研究者の藤木久志は「豊臣政権の二、三の問題—大島正隆論文の紹介」のなかで、大島の鋭い分析力と厳しい史料批判を絶賛する。

#### 4-2-2) 大島正隆『東北中世史の旅立ち』(そしえて、1987年)

大島正隆の論文集。大島の論文のうち日本中世史に関する8篇と民俗学に関する5篇、および付篇「大島の学問と生涯」からなる。

#### 4-2-3) 網野善彦の書評(『列島の文化史』6、1989年)

網野善彦は「ある歴史家の生涯 大島正隆『東北中世史の旅立ち』」と題する論集の書評にて、歴史学と民俗学という全く質の違う資料を生かすうる天賦の才能をたたえ、またその生き方からにじみ出る見事な歴史叙述を実現したと評価した。

#### 4-2-4) 『「大島正隆文書」目録』(『国史談話会雑誌』第51号、2011年所収)

東北大学史料館所蔵「大島正隆文書」のうち2010年寄贈分までをとりまとめたもの。最新情報は随時史料館のホームページにて掲載予定。

#### 註

- (1) 柳原敏昭(東北大学文学研究科教授・日本中世史)、山田仁史(同准教授・宗教学)、佐竹輝昭(同大学院博士後期課程在籍・日本近世史)、曾根原理(東北大学史料館助教・日本思想史)、佐藤健治(同協力研究員・日本中世史)、七海雅人(東北学院大学准教授・日本中世史)
- (2) 『大島正隆資料集』(東北文化資料叢書第6集)を作成中で、2012年3月に刊行予定。